

## 「カルダ鉄道の思い出」をめぐって

——カフカの創作過程の試み(4)——

藤川 晴 男

フランツ・カフカは、1914年4月にフェリーツェ・パウアーと婚約し、またその婚約を解消した7月12日以後、〈規則づくめの、虚しい、気違いじみた独身生活〉(8月15日、前稿既出 T 422)を文学作品によって正当化しようと試みた。〈8月21日〉に記載のある、彼が同時に手をつけた〈三つの作品〉といわれているものは、ヨーゼフ・Kを主人公とする長篇『審判』と、中篇『流刑地にて』そしてロシアの物語『カルダ鉄道の思い出』だった。この間、フェリーツェやグレーテとの文通は跡絶えていた。豊かな創作意欲に満たされ、彼が静かに執筆に専念し得た期間は、7月13日より10月15日までの3ヶ月間で、前稿にみえる〈10月7日〉の『日記』の次に記述する〈10月15日〉から、再びグレーテとの文通がはじまっている。〈二週間の満足のゆく仕事。ぼくの置かれている状態をある程度は完全に把握。——今日は木曜日(月曜日に休暇は終わったが、さらにもう一週間の休暇をとった)、BI嬢(グレーテ・ブロッホ)からの手紙。これをどうするかは分らない。分っていることは、ぼくが独りでいることに決まっているということだ。……〉と、日記に書き並べてきた執筆進行状況(主として『審判』のうちでは今までになく最も明るいニュースである。がこれに続いて〈アスカニッシャーホーフ〉での問題の‘裁き’の記述が、これまたいよいよ現れてくる。妙なことにこの〈10月15日〉の『日記』の記述を境に、創作欲のピークは漸く下降の兆候をみせはじめていることだ。つまり、第一次世界大戦勃発と同時に創作欲のもり上りをみせていた1914年最後の五ヶ月間——作家としての彼の生活の第二の重要な時期が、その真只中でピークに辿りつくという興味ある結果を記憶しておきたい。『カルダ鉄道の思い出』は、この第二の創作意欲の異常なもり上りをみせはじめた、恰もその当初に創られたこと、そうして『獵師グラックス』の前駆資料と見做されている点、われわれには特別関心の深い作品にもなるのである。

三つの物語を較べた場合、この『カルダ鉄道の思い出』(Erinnerung an die Kaldabahn T 422~435)は未完であることも作用して見おとりがするけれど、筆ならしという意味ではなかなか捨てがたく、むしろ好もしくもあり、カフカ作品のなかでは別種の趣のある珍重すべき短篇に思われる。〈8月21日〉の『日記』を再読してみよう。

〈かかる希望を抱いてはじめてしたが、三篇の物語すべてにはね返された。今日が最も手強かった……〉と。

この日、このロシアの物語を中断したのは明らかなので、手強い相手であったのはこの短篇のことになるに違いない。けれども、本来の仕事はあくまでも同時にこの8月の第二週から開始されてもいる『審判』に彼の衝動が向けられていたことは、〈ロシアの物語はいつも『審判』のあとに書いたがよかった、というのがどうも正しいようだ〉という但し書きによってみても判る。そのことは、この日の終りの言葉でも明らか通り、ロシアものをこうし

て書いたのは『審判』のためにも、〈全く無益ということはなかったのだ〉。してみると『審判』も『流刑地にて』もともに別紙に書いていて、同時に書き進めたとすれば、むしろ、この日記帳に書かれている『カルダ鉄道の思い出』は、三つを較べても判る通り、その中では比較的軽い部類のものであって、これだけでは手強い相手ではないが、三つが一どきに加われれば、それだけ手強い痛手に陥り易くなるだろう。はじめの〈かかる希望〉というのは、すぐ後に〈明らかに機械的な妄想のみ持みとしているこの笑止な〉とある、そうした希望のことなのであろう。妄想は (Phantasie) であり、機械的 (mechanische) は謙遜であろうが、<sup>はがね</sup>鋼の自負心がのぞいているようでもある。ともかくも、回復のための自己との対話の出来ることを喜びとし、全き虚しさのなかにいても、それほど硬直することもない (Ich starre nicht so in vollständige Leere. …… 8月15日, 前稿参照) ゆとりをもって、これは書きはじめられたのだ。

H. ビンダーによれば、この主人公は以下のように解釈される。「『死刑宣告』(‘Das Urteil’ E 53~68 Sept. 1912) のなかで、故郷の人々と離れ、ロシアで独身のまま暮す友人のイメージが、いま婚約の挫折したこの直後、矛盾なくこの物語との脈絡のなかで浮び上がってくる。このイメージには、つまりそこで父と婚約のことで言い争いをしており、またあの『変身』(‘Die Verwandlung’ E 71~142 Dez. 1912) の化身でもある Samsa-Kafka の、ある種の潜在的に抑圧された存在の可能性が描出されている」と。

ロシア内陸部の涯しない草原のある小さな沿線に、駅員として昔雇われた話し手の「私」を主人公に設定し、〈ここで問題とするにはいかにも適切さを欠くさまざまな理由から、作者は当時、かかる寂しい場所を「私」に求め〉(Aus verschiedenen Gründen, die nicht hierhergehören, suchte ich damals einen solchen Ort. T 422) させたのだ。ならば「適切さを欠かなければ、強いてこのように寂しい場所を主人公に求めさせなくもよい」という逆説が仮りに成立つてもあろう。この点を裏面から照らし返すとき、上述のH. ビンダーの解釈がたしかに参考になる筈だし、『獵師グラックス』の先駆資料とされている特質は何かについては特に注目する必要が起るのである。

隣接する比較的大きな都邑、カルダ (Kalda; 地理上の偽名。作者 Kafka とは母音・子音の位置配合はパラレルであり、Kではじまっている点、Gracchus = deutsch Dohle, tschechisch kavka と同じように、空想上の地名のゆえに却って作者との一体感を示している) から車で六日はかかるあたりのさびれはてた荒野が彼を誘惑したひとつには、この地が大へん猟獣の多い地方 (eine außerordentlich wildreiche Gegend T 430) であるというふれこみでもあったからだ。狼や熊だけが出没するはずであったのに、これは錯誤であったことが判明する (Nun zeigte sich, daß von jagdbarem Wild hier keine Spur war, nur Wölfe und Bären sollten hier vorkommen, a. a. O.) — 野獣のいる地帯というのが、ここから三日は離れた場所のことであったという。その代りに異常に大きな熊鼠たち (eigentümliche große Ratten a. a. O.) が小屋の乏しい食糧を喰い荒しに穴を掘って地中から侵入してくる。

自動車でも運べるほどの軽い荷物をつんだ二台の列車が朝と晩に通り返り、夏季に二、三の耕作人が乗り降りするだけで、仕事とってはほとんどない。駅から左右一キロメートルの路線を掃除・点検することだけが、毎日の彼の任務とされている。眼のとどくかぎり拡

た平坦な、ありあまる周りの土地を耕して野菜畑をつくり、できるだけ他人の世話にならぬようにつとめようとしても、春まで固く氷った強情な大地に病弱な体ははね返される(《Du bist ein kränklicher Mensch. Du wirst nicht mehr von hier fortkommen.》 T 426)。かくて、他にすることがなければ大抵寝台に横たわり、しばらくすればきつと、自分に課しているこの孤独が過去の煩らいを追いはらいはじめるに違いない、などと自分に言いかかせているのである(wenn ich mir auch sagen mußte, daß diese Einsamkeit, die ich mir auferlegt hatte, schon nach kurzer Zeit die vergangenen Sorgen zu zerstreuen begann. T 424)。

ところが、ひとりの人間を孤独のなかにしばらく閉じこめておくという不幸が、大きな試煉であることを悟った彼(Ich habe überhaupt gefunden, daß es eine große Kraftprobe für ein Unglück ist, einen Menschen in der Einsamkeit dauernd zu beherrschen. a. a. O.)には、自分が考えていた以上に非常に親しみ深い(große Verträglichkeit a. a. O.)土地の人々とのつき合いが間もなくはじまるのだ。

駅と五つの村及び村と村との間がそれぞれ数時間ずつ隔っている。職を失いたくなかったため、仕事熱心な彼は向うへ出向くということはあえてしない。孤独は何よりも強力であり、人をふたたび人々のもとに追いやるもの(Die Einsamkeit ist mächtiger als alles und treibt einen wieder den Menschen zu.)だと、導入部分で作品のなかに断わってあるそのこと自体のなかに、緊密さを欠いた作全体の弛み(つまり、作者の作品にのぞむ態度のゆとりと隙とでもいうべきもの)が、読者にとっては反対に珍重すべく、好ましい印象をも与えかねない結果を生んだのであろう。とにかく、自分をも含めカルダ鉄道そのものがすべて崩壊を待つ(und wartete im übrigen auf den Zusammenbruch des Ganzen. T 423)危機的状况にありながら、色調の至って明るいのはそのためかもしれぬ。今漸くF. B.からも離れ、しばし孤独の安らぎのなかにいる、そうした現実との心情の距離感が、未だ『審判』や『流刑地にて』よりも遙かに近いのであろう。

だが、この作で『獵師グラックス』の重要な道具立てが、ぞろぞろと響<sup>くつ</sup>を並べ、姿をみせる。先ず第二段落でいち早く、次のように書かれている。

Bei dieser Bahn also war ich angestellt und bewohnte einen Holzverschlag, der noch seit dem Bau der Bahn dort zurückgeblieben war und gleichzeitig als Stationsgebäude diente. Er hatte nur einen Raum, in dem eine Pritsche für mich aufgestellt war – und ein Pult für mögliche Schreibebeiten. Über ihm war der telegraphische Apparat angebracht. (T 423 f, 傍線は執筆者)

彼の唯一の所有物である小屋(daß meine Hütte, die mein einziger Besitz war, T 432)は、板囲いで、ここの鉄道建設以来残され、駅舎となっている。部屋はただひとつだけで、木製の寝台が一ヶと、書き物ができる斜面机ひとつが備えてある。その上方には、電話器がすでに設置されていた。更に先へ進むと、次のようにこの‘寝台’には動きが加わる。

……Ich lag tagelang auf meiner Pritsche und kam nicht einmal bei Ankunft der Züge

hinaus. Ich steckte dann nur den Kopf aus der Luke, die gerade über der Pritsche angebracht war, und machte die Meldung, daß ich krank sei. (T 425, 傍線は執筆者)

一日中自分の寝台に寝ころがったまま、汽車が着いても一度も出ていかぬ。寝台の上のところにある覗き窓から首を出し、「ぼくは病気だよ」と報じておく。次いで、月一度の検査の後、上役と互に火酒を飲み仲がよくなり気脈が通じて、二人はこの寝台で10時間の共寝をする、抱擁をしながら (T 427)。次いで状況は悪化する、病気ではないが。

Sie waren die einzigen, die mich um die Zeit der langen Dämmerung störten. Sonst lag ich auf der Pritsche, dachte nicht an die Vergangenheit, dachte nicht an die Bahn, der nächste Zug fuhr erst zwischen zehn und elf Uhr abends durch, kurz ich dachte an gar nichts. Hie und da las ich eine alte Zeitung. …… (T 429, 傍線は執筆者)

彼等(淋しい駅に引き寄せられてくるならず者たち)が長い夕闇の時間を、相手になり気を紛らせてくれる。でなければ、寝台に横になり、過ぎ去ったことにも、鉄路のことも考えない。次の便の通過は、夜の10時と11時の間なのだ。つまり、ぼくは何ごとにも思いをかけぬようにした。時折、古新聞は読む。……

この‘寝台’が終りに現れるころには、次のように偽りのない病苦で呻吟する場所となる。

……Ich saß auf dem Bänkchen vor der Hütte und begrüßte heulend den Zug, heulend begleitete ich seine Abfahrt. In den Nächten kniete ich auf der Pritsche, statt zu liegen, und drückte das Gesicht in die Felle, um mir wenigstens das Anhören des Heulens zu ersparen. Ich wartete gespannt, bis das Springen irgendeines wichtigen Blutgefäßes allem ein Ende machen würde. …… (T 434, 傍線は執筆者)

駅舎から2時間ばかり離れた奥地に水源がある。水汲みがてら、しばしば水浴びをしたため主人公のかかった発作の苦しい咳を、列車乗務員に作者は〈狼ぜき〉(,Wolfshusten)と呼ばせている。ぼくは小屋の前の小さなベンチに腰を下ろし、唸りながら列車に挨拶をし、唸りながら出発を見送るのだ。夜ともなればぼくは、体を横に休める代りに寝台に跪ずき、顔を獣皮のなかに押し当て、せめてはこの唸り声を聞かずにすませようと工夫をする。そうして作者は、「カルダ (Kalda) 鉄道」の廃線 ( )Wir werden die Bahn einstellen müssen《T 426 f) という云わば企業の極限状況のなかで、こうして主人公に肉体の消滅をもあえて強要するのである。〈どこか大切な血管が破裂して、すべてに結末をつける瞬間を、心を張りつめて待っていた〉。しかし、そのようなことにはならず、咳は数日のうちにやむが、後遺症は残る。〈少しも快方にむかわず、悪くなるばかりであること、それゆえカルダへ行きそこで数日静養する必要があることを、はっきりと覚る〉という複合文で、この断片を終らせている。やはり、手強い相手ではあったのだ。

以上は、'Pritsche' (寝台) の出てくる箇所をほぼとりあげてみたのであるが、その他に『猟師グラックス』の重要な表徴としてH. ビンダーは次のようなものを挙げている。——孤独な狩猟 (das einsame Jagen), 狼 (die Wölfe), 一台の寝台しかない、不毛な板塀小屋の滞在地 (der Aufenthaltsort in einem kahlen Verschlag, in dem eine Pritsche steht), 執筆を暗示する要因 (das angedeutete Moment des Schreibens), 時折動かなくなる消耗状態 (die zeitweilige Bewegungslosigkeit), 最後におぼろなゆらめく灯 (das flackernde kleine Licht)。

ところで『猟師グラックス』の本文を一瞥してみよう。そこに於て 'Pritsche' の意味するところを比較すれば明らかなように、シュバルツバルト出身のこの猟師は、寝台の上で体を寛ぎ伸ばすことができるためには、猟銃や獲物袋をただ投げ棄てるだけでよかった (Ich liege auf einer Holzpritsche, B 103/wie fröhlich ich mich hier auf der Pritsche ausstreckte zum erstenmal. a. a. O.)。だがこの寝台には、生きながらに死に死にながらに生きて昇天できぬ人間を縛りつけ、転がし棲まわせてあるために、'Pritsche' の形象化された意味は拡大し、作品全体を覆うものとなっている。Pritsche の意味は重く、意識的道具立となってゆく。すると、冒頭のひとりの人間を乗せる担架 (Bahre) からして死の寝台 (棺) と転化し (B 99), 「木の檻」 (Sonst ist mein Holzkäfig ganz leer. B 103) といわれる船室そのものが、死の小舟 (Todeskahn B 102) と同定する。

何も所有するものもなく、この世から遠ざけられた存在は、孤独のなかでまさしく「しかばね」 (Leichnam) と自らを感じ、この「担架」の上に「グラックス」を乗せないではもはやすまなくなつてゆく作者にとって、「独身」というものがもつ他ならぬこれが表徴なのであった。とH. ビンダーは述べている。当時も置かれ、その後も独身を維持して屈辱を舐めながら、いよいよ深化したひろがりや完成度を現してゆくカフカの作品は、たしかに「独身」と世の苦闘とをテーマにした作が基調をなすとはいえ、もっともとと拡大解釈して「独身」に殊更こだわる必要もないようにわれわれは考える。むしろ、これら二つの作品の裏には「独身」になった失敗——F. B. との事情がからんでいるとはいえ、この現実の生活を死ぬることが、即座に文学を営む覚悟に通ずる立場をとろうとするわれわれの考からこれらカフカの作品を見直して行くとき、『カルダ鉄道の思い出』から『猟師グラックス』までの距離は、未だ少しく間があるように思われる。しかしながら、上述した「カルダ鉄道」の「寝台」は、生命をもつ語り手の主人公が体を休める場所である。この孤独の場に、「寝台」とともに時を過ごす主人公の体が次第々に衰弱し、勤務して3ヶ月にもならぬうちさきにみた通り手強い病気にかかる。小屋を熊鼠から守り、冬将軍に備える準備一切はこれによって頓挫する (Alle Vorbereitungen aber, die ich machte, um die Hütte gegen die Tiere zu sichern und mich für den Winter zu verwahren, mußten eingestellt werden, als ich – das erste Vierteljahr meines Dienstes näherte sich seinem Ende – ernstlich krank wurde. T 434)。こうした状態を心理的に辿って行くと、最後には「死体」という、窮極の考が直ちに浮び上るだろう。当然の径路であり、帰結である。そこから「担架」=「寝台」の上で蘇る、永久の生死運動を繰返す「グラックス」という特異な固有名をもつ主人公をあらたに創るまでには、創作体験と思考の坩堝のなかをいましばらく作者はくぐりぬける必要があったというまでのことだ。

さてわれわれは、描写にすぐれたこの「カルダ」と、表面寓話に近い語り口の「グラックス」との優劣を比べる愚は、さけて通らねばならぬであろう。

ただこの際、以下の二点だけを比較参考に供してみたい。すなわち第一は、「グラックス」の船室の壁にかかる絵、これだけしかない装飾の絵のなかのブッシュマンが持つ槍 (An der Wand mir gegenüber ist ein kleines Bild, ein Buschmann offenbar, der mit einem Speer nach mir zielt und hinter einem großartig bemalten Schild sich möglichst deckt. B 103), この槍が大きく画かれている楯の蔭にほとんどかくれていながら、鋭い刃先をこちらへ向け先が光ってみえるのだが、これは絵という額縁のなかでのことである。この槍の刃先と「カルダ」の固い土穴を掘りすすむ熊鼠の見えかくれする爪とを較べて見たまえ！ その迫真力とテーマは、上述の「グラックス」の額縁の絵の中へ図柄として流れ込む一方で、他方、『審判』の結末にも飛び散り、『獵師グラックス』と『審判』とがこの点でまた、別に照応するという仮想である。〔前稿、33頁参照〕

第二は、「カルダ」のなかで、利益社会のなかに生きのびる自分を含めた同僚や上役とは別に、共同体のなかに住む親切な村人と70才になる老人のこの二つのタイプの人間と、前論考(3)の冒頭『日記』(1914年7月29日)の記述部分に続いて姿を現わすはずの「門番」(‘der Türhüter’, T 414)の性格との著しいニュアンスの違いに目を見はるのだ。これが比較対照によって、「カルダ」と『審判』の内容の相違(ひいては、作者の作へのとり組み方の濃淡)が多少ともうかがえよう。

これらの人間タイプの間で登場してくるのが、「カルダ」の上役の検査官(‘Inspektor’)の役どころである。検査のときと終了後の人間の変貌ぶりとを戯画的に意識して描き分けているが、成功しているとはいえないであろう。これら鉄道の組織のなかの人間は、作者の勤務体験を如実に反映したと思われるふしがないでもない。

その1) In der ersten Zeit, als ich noch alles neugierig auffaßte, spießte ich einmal eine solche Ratte auf und hielt sie vor mir in Augenhöhe an die Wand,…… Das Auffallendste an diesen Ratten waren die Krallen, groß, ein wenig gehöhlt und am Ende doch zugespitzt, sie waren sehr zum Graben geeignet. (T 431)

はじめ赴任のしがけには、すべてのものが好奇心の対象となる。狼や熊といった獵獣を仕留められなくなった彼は、その対象を小屋の囲りでいつも見かける熊鼠に移す。あるとき、それらの一匹を長いナイフで突き刺し、真向いの壁に目の高さに吊るすのだ。孤独の慰めにふさわしく残虐にすぎるのだが、素振りさえみせず、比較的小さな動物は目の高さのところにおいて、はじめて正確に見ることができる。地面にいるのを腰をかかめて見るのでは、不完全な思い違いをやりかねないものだ、と理屈をつけて熊鼠というこの対象を冷酷な目で凝視する(感情をまじえたこうした類の形容詞は、とり去らねばならぬのであろう。E. カネッティは、引き上げることによって動物と対等になるようなものだ。…と穿った解釈を施す。小さな動物を目の高さに引き上げる場合に考えられるのは、こういう被造物を拡大したくなるカフカの性癖である。とも)。フローベール(1821~1880)の系譜をひくそのリアルな目は、

熊鼠の特長を異様に拡大して映し出す。〈最も目につくのはけづめであった。すこしくぼんだ、先が鋭く尖っている、地面を掘るのに大へん適していた〉。壁の目の前に吊り下げられたこの熊鼠は、最後に痙攣を起しながら、その息づく自然の野性に抗うようにけづめをすべてピンと伸ばして硬直死する。それは、あるものに向って差し伸ばされた小さな人の手そっくりだった (sie waren einem Händchen ähnlich, das sich einem entgegenstreckt. a. a. O.)。

この個所を記憶に留めておき、一先ず先へと進むことにしたい。熊鼠らは夜になると、小屋のそばの固い地面を音をたてて走りすぎるので彼はよく目を覚した。そこで乏しい明りをつけ熊鼠の穴掘りの観察が行われるのである。戸口のわき柱の下の割れ目のところで、一匹の熊鼠が外側から例のけづめをつつ込みしきりに仕事をしているのが見えてくる。「私」は目的を心得ている労働者の単純作業を思い浮かべ、鼠の仕事をじっと見つめはじめるのである。この動物の穴掘り作業をみているうちに彼が鼠に近ずいてゆくけれど、ここはあくまでつき離れた観察に終始する。この規則的な落着いた鼠の行動を見ているうち、彼は思わず醜態に襲われもする。〈すると私は、もはや蠟燭の灯りを消す気力もなくなり、明りは一瞬、仕事をしている熊鼠を照らし出す〉 (Dann hatte ich nicht mehr die Kraft, das Wachslichtchen zu löschen, und es leuchtete noch ein Weilchen der Ratte bei ihrer Arbeit. T 432) この最後の描写も〈差し伸ばされた小さな人の手〉の記述、及び「グラックス」の枕辺のロウソクの灯り (B 100 f) とも合せて、同時に記憶に留めておくべきであるだろう。

さて、ある暖かい晩、彼は用心して灯りを点さず、この生きものをじかに見に外へ廻る。尖った鼻づらをつけた頭を深く沈め、ほとんど両前足の間にその頭を押し込む姿勢をとっているのは、出来るだけ体を細くして板に沿って這い込み、また出来るだけ深く尖ったけづめを板の下へ潜らせるためだ (Es hatte den Kopf mit der spitzen Schnauze tief gesenkt, fast zwischen die Vorderbeine eingeschoben, um nur möglichst eng an das Holz heranzukommen und möglichst tief die Krallen unter das Holz zu schieben. a. a. O.)。このあたりになるともう、この鼠とは人畜一体に近く、出来るだけ狭く (eng)、出来るだけ深く (tief) という鼠の掘り進む姿勢は、カフカの文学そのものの姿になってくる。そうして、もしもだれかが部屋のなかにおいてこのけづめをしっかりとつかみ、体全体を引き出してやれそうだと思うと、それだけで、あたりにはすべて緊張した空気が漲るのだ。だが、この生きものをぼくがひと蹴りでうち殺すことによって事はおしまいになる (Und doch war auch alles mit einem Tritt beendet, durch den ich das Tier totsclug. a. a. O.) のである。この小屋の板壁を隔てた内と外との想念のやりとりのなかに、この「けづめ」 (die Krallen) は恰も「グラックス」の壁絵のなかの「槍」の役割をしはじめてはこないか、どうであろう？ その場合、「板壁」 (Holzverschlag) は「楯」ともなろう。たったひとつの虚ろな冷たいロシアの荒野の部屋に、「グラックス」の「木の檻」と同じく、これだけが飾りとでもいうように、けづめである小さな掌をひろげたいうなれば「磔」の熊鼠は、彼の唯一の所有物——小屋が侵されることによって撲殺される。「独身」の彼の〈自己保存のための闘争〉のひとつとでもいうごとくに。

その2) ……Schon im ersten Monat fanden sich solche Leute ein, aber wie freundlich

sie auch waren, es war leicht zu erkennen, daß sie nur kamen, um vielleicht ein Geschäft mit mir zu machen, sie verbargen übrigens auch ihre Absicht gar nicht. …… (T 425)

自分が完全な孤独に耐え切れるような人間ではないことに気づいた彼には、乗客や、長い道のりをも厭わぬ（村の）人々との交際がひと月ほどするとはじまる。しかし彼等は、どんなに親切であっても、自分と仕事の取引きをするために訪ねてくるのであり、その意図をその人たちは少しも隠しだしてしない、そうした日常の素朴な地域の人びとだが、いろいろな必需物資を彼等からはじめはほとんど吟味せずみな買っていた。ところが、その無制限な買い方が彼等に軽蔑の目で見られたらしいと受けとる、この鋭敏な感受性は主人公の側のものでありながら、買い方を差控えた理由は何か他にもありそうな（unter anderem auch deshalb, weil ich……a. a. O.）気をもたせるのだ。

そのうちの曰くあり気な隣村のひとりの老農 Jekoz を作者は、人間のある種の類型として終りの方で登場させている。

Ein Bauer aus dem nächsten Dorf, namens Jekoz, hatte mir längst versprochen, zu diesem Zweck schöne trockene Bretter zu bringen, …… (T 432 f)

「私」は小屋を熊鼠の侵入から守るとともに、冬に備え今まで踏み固めた地面にすぎなかった小屋の床を板張りにしようと思いつつ、頑健な大きな体で、二週間に一度の「私」への訪問を欠かしたことの無いイエコッツは、上質の乾いた材木を持ってくるという約束をその都度守らないのである。年をとりすぎていて自分では持ち運べぬから息子に持たせるつもりだが、その息子は今、野良仕事で忙しい。言訳は次々と変ってゆく。やがて「私」はとうとう、老人の作りごとになだまって耳を傾けていることにした（kurz, ich konnte ruhig die Lügen des Alten anhören. Mein ständiger Gruß war: »Die Bretter, Jekoz !« T 433）。

〈イエコッツ、材木は！〉が挨拶文句となる。すると、半ば回らぬ舌先でまた弁解がはじまるのだ。私は、検査官（Inspektor）とか頭目（Hauptmann）とか通信技師さん（Telegraphist）とか呼ばれて、月に一度やってくる〈検査官〉の地位にこのときだけは押し上げられる。虚（die Lüge, Schein）と実（die Wahrheit, Wesen）との根くらべが、老人を外へ押し出しても、なおも続く（Ich hörte so lange zu, bis es mich müde machte und ich ihn hinausschob. a. a. O.）のである。大へん粗末な生活物資でありながら、さきの村人たちが売る労をおしまなかったのに比べ、老人は極度の売惜しみを続けて倦むところがない。この小屋をとり毀して息子や近所の者を手伝わせ、頑丈な家に建てかえるというもっともらしいうそまで出してくる。老人は、70才をすぎていると自らいうが頑健な体つきである。また、表向き弱い腕を退去してゆく戸の内で弁解のために持ちあげる仕ぐさをするが、この両腕で実は、ひとりの大人を押し殺すことだって出来ないわけではない（2年前には、あの『死刑宣告』のなかで、主人公 Georg Bendemann は、このような老人の父から溺死の刑の宣告を受けたばかりである。この老人に対処する作者の対応の仕方をみると、H. ビンダーの述べるごとく、〈ある種の潜在的に抑圧された（息子の）存在の可能性〉が透かしぼりにさ



れてくるようでもある)。

……Ich wußte, warum er die Bretter nicht brachte, er dachte, wenn der Winter näher käme, würde ich die Bretter dringender brauchen und besser bezahlen, außerdem hätte er selbst, solange die Bretter nicht geliefert seien, einen größeren Wert für mich. Nun war er natürlich nicht dumm und wußte, daß ich seine Hintergedanken kannte, aber darin, daß ich diese Kenntnis nicht ausnutzte, sah er seinen Vorteil und den wahrte er. (T 433 f)

さて、上述の内容に引続いて現れるのが、この原文である。原文は、二つの文意に大別できる。前文は (für mich.) までで、「私」という「語り手」は、〈老人がなぜ材木を持ってこないのか〉その理由を〈知っていた〉。そのわけを老人の立場に立って、語り手である私が考える、というカタチをとる。所謂、間接話法<sup>4</sup>であって、老人が考えたことがらは、接続法二式<sup>5</sup>で現わされる。すなわち、こうした枠組の中で、老人の意見は——〈冬が近づくに従い、床張材木の必要度はさし迫ってくるだろう、すればますます今より材木は高く売れるだろう。その上、材木を納入しない限りは、自分のねうちはあいつにとってそれだけ一層高いたらう〉である。あいつというのは、つまり語り手の私自身のこと他に他ならない。ぐるりと回って再び、意識の舵を自分に向けて帰ってくる、という物言いになっている。

一方、後文は「彼」という第三者の欲深そうな「老人」が、わざわざ〈馬鹿ではないから〉という但し書きを作者によってつけられ、そのあと彼は、〈私が(材木を売惜しみする)自分の底意を見透かしていること〉を〈知っていた〉。と作者によって説明される。そのようなカタチをとる。ここの語り手は、かつて小説の担い手であった語り手とは全く異なる、「カルダ鉄道」の語り手の「私」ともまた違う作者の分身で、「私」の目を直接通さない作者の扮役的登場 [関口文法参照]、つまりは「彼」という役になりかわった作者による、体験話法<sup>6</sup> ('erlebte Rede') と考えて差支えないだろう。語り手の「私」からすれば〈(材木を売惜しみする憎い) あいつの底意を見透かしている〉〈「私」が、このことを利用しない〉点に、己れの優越をみてとり、その優位を老人は維持していた。と、再び作者の扮役性に傾いてゆく。

なかなか微妙な移り行きを表現し得ているのが、そもそもカフカの常用する「体験話法」の特質なのだが、この文全体を統べているのはいうまでもなく作者その人に外ならないのである。この点からみれば、前文の「私」そのものも作者の分身ということになるのであるが、どうも日本の所謂「私小説」の場合とは異なって、「私」と「彼」とのこの二者の「作者」との関係・位置は逆転しかねない、それほどに「彼」の立場が「作者」に近づいてくる気配がするのである。

ところで、話をもう少し分り易くしてみよう——甘い<sup>えも</sup>もの(「材木」)で子供のころを釣る、親と子の関係にたとえてみよう。この子は賢くて親の気持をすぐと覚ってしまうのだ。しかし、親もそれを知っていて、それだからこそ尚も出し惜しみをして(「弁解」だけを繰返して)、子の(「私」の)ころを釣ろうとする。ところが〈私はその材木が是非必要というわけではなく〉、〈そんな板張りはなんの役にも立たないだろう〉(T 433) と思っていたのである。折しもこの年の11月12日の『日記』に笑えぬ記事が載っている。1914年(大正3

年)のことなのだと、すぐさま言い添えておかねばならないが……

〈子供たちに恩返しを期待する両親は(それを要求する輩さえいる)、高利貸のようなものだ。彼らは利子さえ手に入れば危険をおかし、資本を賭ける〉のだと。

だが、しばらく親子論争は止めにしまえ! この老人は「私」とは血縁のない、共同体の村人のひとりであるということ。至極当り前の見方をすれば、これは、血も涙もある、欲深い、いかがわしさに乏しい、田舎の爺というイメージに一応落ち着きそうなのである。ただ、Jekoz' という老人名が、以下に説く『審判』の主人公 Josef K. の Josef [本稿でも同一名の、前稿にも触れた] と、やはり Kalda 同様に頭文字を同じくし、母音・子音の配合が同じ氣息を通い合わせている点だけは、ここを残す。

が、それはそれとして、前論考冒頭部分の『日記』(1914年7月29日)に続く記事に目を転じてみたい。

……Der Türhüter verneigte sich tief. Josef sah ihn ohne Gruß flüchtig an. ‚Diese stummen untergeordneten Personen machen alles, was man von ihnen voraussetzt‘, dachte er. ‚Denke ich, daß er mich mit unpassenden Blicken beobachtet, so tut er es wirklich.‘ Und er drehte sich nochmals, wieder ohne Gruß, nach dem Türhüter um; dieser wandte sich zur Straße und sah zum wolkenbedeckten Himmel auf. (T 414)

〈ある夕暮れ、父と激しく口論をした後〉Josef K. は、〈港の近くの四方へ開けた空地に聳える商館のなかへ、ひどく不安定な気持と疲労とを覚えながら入って行〉く。商館の門番が深く頭を下げる。Josef は礼を返さず、ちらりとそちらを見やる。《このおし黙った下役の者らは、彼等にしてもらわれたいと人が察することをすべてやってのけるな》と、彼は考える。《こいつが失礼な目つきでわしを観察している、とわしが思うと、こいつめほんとうにそうするのだな》そう思い、彼はふたたび挨拶をせずに、もう一度この門番の方に向き直った。門番は通りに向かって、雲に覆われた空を見上げている。

ここに出ている〈門番〉はまさしく、勤めに忠実な、狂いのない、組織社会の利益の、有力な一部門を正確に分担する使用人のひとりである。下層の人(diese untergeordneten Personen)とあるゆえ、上役の人びとも、更にその上を占める人たちも、次々と段状をなして数を減じながら、涯は、雪の上にかくれて君臨する人も或いは存在するかも知れぬ、そのような予感を読者に与える叙述のなされ方なのだ。ただならぬ叙述の気配を余韻のごとくにうす気味悪く伝えるのは、Josef の独白に他ならない——《このおし黙った下役の者らは、彼等にしてもらわれたいと人が察することをすべてやってのけるな》と。《こいつが失礼な目つきでわしを観察している、とわしが思うと、こいつめほんとうにそうするのだな》と。背筋を何か冷たいものの走る、恐怖を呼び起す文、人を成程と納得のゆかしめる文、主観を通り越して向うへ貫徹すると、抛り投げだされて無造作に起ち上る文、それにしてもわずか20字内外でこの〈門番〉の身ぶりと性格を一瞬のうちに捉え得る観察眼と表現力は、もの見事という他はない。自分をも含めた組織社会の一員である〈門番〉の、そうはいってもやはり胡散臭い役柄には、カフカのこうした観察眼と、修飾語の乏しい乾いた文体がふさわしいのであるかも知れぬ。さきにみた「カルダ」の Jekoz 老人の性格とこれとを見較べてみた場

合、著しいニュアンスの相違に気づかずにはおられないだろう。

とも角も、ほとんど孤りで駅舎に勤務している主人公をとり巻く境遇は、かくのごとき地域の老人を包含する共同体のなかであり、そうしたなかのひとつの下部組織へ、主人公をいわば追放した作者の気持はよく分るような気がする。然しここでもまた、石油の配給量不足で燈油もろくに点せず、熊鼠撲殺にあけくれ（斜めの勉強・事務机‘Pult’を書きものに使用した形跡も未だないうちに）、あげくは‘狼ぜぎ’に冒され、熱がひかずに悪くなる一方の主人公を、〈カルダ〉（Kalda）というこの荒野の中心の町の病院へ送り届けて静養させなければならなくなる（Kafka と Kalda との即応が、ここに於てか何か暗示的である）。

カフカは、この主人公に救いの手をさし伸べることはもはや締めて、中断に踏み切る。それは上述した『日記』（7月29日）のメモ、門番‘の細部が俄かに脹らみはじめ、『審判』へ向って展開を遂げ、〈お笑い草のような（物語）の発端部分〉（『猟師グラックス』第二論文参照、P.115 T 450 19. Dez. 1914）がいよいよ滑りはじめていたためもあるだろう。これが法の番人と田舎から来た男の名高い話に発展することは周知のことで、前稿で触れるところがあった。ともあれ、「カルダ」を書いておいたことは、〈全く無益ということにはなかった〉（Ganz nutzlos war es nicht. 前掲 T 435）のだ。

かくて『カルダ鉄道の思い出』のなかで特に、カフカ文学には珍しい自然描写のくたりを終りに紹介してみたい。

……Bei klarem Wetter war das noch bei etwa fünf Kilometer Entfernung möglich, das Land war ja ganz flach. War ich dann so weit, daß die Hütte in der Ferne mir schon vor den Augen fast nur flimmerte, sah ich manchmal infolge der Augentäuschung viele schwarze Punkte sich zur Hütte hin bewegen. Es waren ganze Gesellschaften, ganze Trupps. Manchmal aber kam wirklich jemand, dann lief ich, die Hacke schwingend, die ganze lange Strecke zurück. (T 428)

作品のなかではこうなっている。——上役の検査官が検査に訪ずれて仕事が終る夜にかけ、月に一度の気晴らしのブランデーを、口からもうひとりの人間が頭と喉を突き出して叫ぶほど飲むが、あとの一月はまた酒も煙草ものまず、余り仕事らしい仕事はなかったが、やるだけのことは完全にやるのである。駅から左右1キロメートルの鉄道の掃除・点検を終え、定められた範囲をこえて、駅が辛うじてみえる5キロ離れた地点に晴天の日には行くことがある。それほど平坦に拡っていた。

〈彼方の小屋が、私の目にわずかに閃耀するくらい遙か遠方まで歩いてきたときなど、私はよく、幻覚のため多くの黒い斑点が小屋にむかって動くのを目にした。全同僚、全班員の群である。しかし時には、現実には誰かがやってくる、そのときには斧を振り振り、長い鉄道の全道程を私は駆けもどった〉。

この光耀は貴重である。さきの熊鼠の描写が、変身と動きを表しているとするれば、この場は、動きとともにいかにも宏大な広さを視覚に訴えてくる。この光耀は何か宇宙的なものを

秘めていて、一瞬、天界の明るさに浴した直後、一目散に翼をもぎとられて転落するイカロスの背景をふと思わせる。微妙な動きを瞬時にとらえる表現の冴えは、いつまでもこの作品に新鮮な残象を留めている。幻覚のため多くの黒い斑点が彼の唯一の所有物である小屋にむかって動くのを、反対方向から逆に見る、地獄の瘴気さえほのみえる、これはややふか読みの偏見か。〈田園への憧れ？ それはどうもたしかではない。田園が憧れをかきたてるのだ、限りない憧れを T 556 1922〉。

春赴任し、夜は夏のさ中でも頗る寒く、あり余る土地があっても（野菜畑を作り、牝牛を一头飼う心づもりで、園芸道具や種子さえ携えたのに）自分には耕されぬ荒蕪地で、何キロも距たる川へ飲料水を運びに行く、そのついでに水浴をする。ざっと並べてみれば分る通り、ここの自然は原始に近い自然であって、所謂自然描写とは言えない道具立てばかりのなかで、（熊鼠の撲滅描写はなかで強いて言ってみれば、カフカ特有のそのひとつであろうが）上に掲げて解釈をほどこしたこの光耀は、救済志向が巧まずして無意識のなかに漲っている。

この意味の光の到来を意識的に意図しているかに思われる二つの個所は、この拙論をこれまで繙読いただいた読者にはすでに判明されたことかと思う。即ち、〈そのけずめは、あるものに向って差し伸ばされた小さな人の手そっくりだった〉と、引続き述べられる、〈明りは一瞬、仕事をしている熊鼠を照らし出す〉とである。何れも微光は小動物に自らを仮託したカフカの影なのである。

—1980. 9. 26.

## 註

### ■使用原典及び参考文献

- F. Kafka, Tagebücher 1910~1923 (S. Fischer Verl. 1950) [T]
- F. Kafka, Der Prozeß (S. Fischer Verl. 1946) [P]
- F. Kafka, Erzählungen (S. Fischer Verl. 1965) [E]
- F. Kafka, Beschreibung eines Kampfes (S. Fischer Verl. 1946) [B]
- F. Kafka, Die Aeroplane in Brescia (Fischer Bibliothek 1977)—Mit einem Nachwort von Reinhard Lettau
- Hartmut Binder, »Der Jäger Gracchus« (Alfred Kröner Verl. Stuttgart 1971)
- Hartmut Binder, Kafka Kommentar (Winklar Verl. München 1975)
- Elias Canetti, Der andere Prozeß (Carl Hanser Verl. 1973)